



Title	ジル・ドゥルーズの哲学における「亀裂」の意義について
Author(s)	小谷, 弥生
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/91893
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (小 谷 弥 生)

論文題名

ジル・ドゥルーズの哲学における「亀裂」の意義について

本論文は、現代フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze, 1925-1995) の時間論、とりわけその主著『差異と反復』(1968)で提示された「亀裂 (fêlure)」を主題とし、これがドゥルーズの哲学において極めて重要であること、また「概念」と呼ぶに相応しい意義を持つことを示すとともに、ドゥルーズ哲学のさらなる解釈の可能性を提示することを企図している。ドゥルーズによれば、《私》の「亀裂」とは「未来 (avenir)」すなわち「死の本能 (instinct de mort)」を根源的原理として理解される時間形式と本質的に連関している。また「亀裂」はヘルダーリンの詩論における「中間休止」と等しきものであるという。本論はまずこの二点に着目することから議論を始め、全Ⅲ部構成(時間 - 文学 - 演劇)によって「亀裂」の検討および議論を展開する。

《本論の構成と各章の論題》

【第Ⅰ部 ドゥルーズ哲学における時間と「亀裂 (fêlure)」】ドゥルーズが言及したものの明確な概念定義を示していない「亀裂」「中間休止」そして「未来」について検討を行う。

【第Ⅰ章 ドゥルーズの時間】ドゥルーズの時間論を概観した上で、「亀裂」と等しいものとして示されるヘルダーリンの「中間休止」の時間論的意義位を検討する。「中間休止」は詩の中に〈前〉と〈後〉を生じさせる契機であり、それを時間論に置き直して解釈するとき、すなわちそれは「未来」が生まれ出(いづ)る裂開でもあることがわかる。しかし「未来」の根源的原理である「死の本能」と本質的に連関する「亀裂」が感受され顕在化するとき、それは自己の地平に走るひび割れを発見するときである。それはまさしく自己が「崩壊」の途を進んでいる最中(さなか)にあるという事実の発見でもあり、自己が「崩壊」するという危機的状況に対し自明にならざるをえないときでもある。「亀裂」はなぜ自己の身を危険に晒すものでありながら、自己によって発見され、さらには「思考の条件」として必要とされるのだろうか。これらの問いを検討するために、ドゥルーズが言及した「亀裂」の検討に進む。

【第Ⅱ章 「死の本能」と「亀裂」】ドゥルーズが「死の本能」に深く関わる「亀裂」が共通して描かれている、と注記した三つの偉大な文学作品、エミール・ゾラの『獣人』、スコット・F・フィッツジェラルドの『亀裂』、マルカム・ラウリーの『活火山の下』の解釈を、ドゥルーズ自身は行わなかった三作品を同時に比較検討するという意義のもとに行う。『意味の論理学』(1969)の「第Ⅱセリー 磁器と火山」および「ゾラと亀裂」を中心に、とりわけ作品自体が難解であるがゆえにこれまで明確な検討がなされてこなかった、ラウリーの『活火山の下』に関する解釈・評価に取り組むとともに、ドゥルーズがなぜこの三作品に着目したのか、また、そこで描かれている各々の「亀裂」の差異と、それら差異を超えてなお「死の本能」と深く結びついているのかという共通性についても検討する。こうした「亀裂」という概念は、時間論のみならずドゥルーズが構想する差異の哲学において新たな契機としての意義を持つ。「亀裂」は常に思考の条件と関わるものとして、また見出されるべき「真の狂気」の射程において捉えられなければならない。この過程において「亀裂」は単に「死の本能」を知るための方法ではなく、それ自体としてもドゥルーズ哲学において非常に重要な意味を持つという発見に至る。また、ドゥルーズがこれら三つの文学作品を介し、文学によって語ろうとしている哲学とはいかなるものであるのか、という問いが新たに立ち現れることになる。

【第Ⅱ部 文学における「亀裂」と「健康 (santé)」】ドゥルーズが「亀裂」という契機を思考の条件として重

視しながらも、三作品の主人公たちが各々に亀裂によって「崩壊」の途を歩むこと、あるいは破滅することを受け、亀裂を見つめながらも崩壊しない方法、すなわち「健康 (santé)」を希求することになる。

【第3章 アルコリズム (alcoholisme) の時間論的意義と健康 (santé)】「反復」によって「差異」を浮かび上がらせるドゥルーズ的方法によって、再び三つの文学作品を「亀裂」と「健康」という観点より検討する。これら三作品におけるもうひとつの共通項が「アルコール」であるが、従来の解釈においてはドゥルーズが語る〈アルコリズム (alcoholisme)〉は文字通り単なる臨床的な「アルコール中毒」を示すものと解釈されてきた。しかしこれら三作品においてアルコールは酩酊そのものが目的なのではなく、むしろ方法として用いられており（作者自身、とりわけフィッツジェラルドとラウリーが文字通りの「アルコール中毒」であるとしても）、むしろアルコールによって「現在」という時間を硬化させ、通常であれば不可能な時間性を可引き伸ばし、それを観察記述することを可能にするという意味において、アルコールはある種の〈isme (主義)〉として選択されているという本論独自の解釈を試みる。

【第4章 精神の健康 (santé) と文学】ドゥルーズが希求する「健康に終わる亀裂」がいかなる方途によって可能となるかを再検討しつつ、ドゥルーズのパロウズへの言及について解釈を試みる時、ドゥルーズ自身もまた実現しえなかったものとしての「健康に終わる亀裂」、それがいかにして可能でありうるのかという問題を主題化する。ドゥルーズが希求したもののひとつに、「健康に終わる亀裂」と深く関わり、且つこれを実現するために体現されるべき「真の狂気」がある。これらはドゥルーズが文学のうちに何を見出し、何を希求していたのかという問題にも深く関わっている。仮に「亀裂」が未来の根源的原理であり、人間にとって不可避的なものであるとするならば、「亀裂」と共にありながらも生きる人間、その存在の在り方についても検討することもまた必然である。それゆえ「亀裂」とは単に時間を論じるものではあり得ず、むしろ時間という問題をその本質に備えた人間の「亀裂」という問題、ひいては人間において「亀裂」とはいかなるものであり、またいかにして時間、とりわけ「未来」と関わっているのかという問題について論じる。

【第Ⅲ部 現実化運動を超えて ―演劇と仮面、空虚と充填】「亀裂」を可視化するものとして、また「真の狂気」を体現するものとして舞台芸術である「能」に着目する。ドゥルーズは「哲学的表現の新しい手段の追求は、例えば演劇や映画のような芸術の刷新に見合った形で遂行しなければならない」というものの、演劇については、それを非常に重要なものとして提示するにもかかわらず、やはり詳細に概念定義が行われていないがゆえに不明瞭である。この点も踏まえ、【第5章 演劇的空間と現実化運動の意義 ―「真の運動」へ】では、ドゥルーズ哲学における「演劇 (théâtre)」の意義を今一度検討し、それが「現実化運動 (mouvement réel)」であるということの意義、すなわち「運動」について、ドゥルーズ哲学における「演劇」を概観した上で両者の関係を整理し、キルケゴール－ニーチェの系譜上にある「仮面の内部の空虚」と充填という問題について検討し、ドゥルーズが示した「未来の演劇」と「新たな哲学」を創造することの意義を論じる。

【第6章 「能 (Nô)」の精神と時間性 ―哲学との邂逅】「亀裂」およびドゥルーズの「未来」の時間性を解釈する上で、また日本語において思考する対象としても極めて優れた芸術である「能」の解釈にあたる。能が体現する「離見の見」という能楽師の舞台上での自我意識状態が、ドゥルーズが言及する「真の精神分裂病」および「真の狂気」の境地と極めて等しいもの、すなわち分裂と統合が同時的になされる理想的状態であり、自我の二重性の超克でもあることを示す。その上で「能」における時間と自我の哲学的意義について検討し、哲学との邂逅を試みる。

【付論：見えないものに「成る」こと】既存の能面研究や能楽研究に対する批判的検討と共に、能の原点でもある薪能を、むしろその「見えなさ」に着目しつついかにして「能」、とりわけ薪能という「見えないものを見てゐるのか」、そしてそのような場においてなお表現される感情を感受することができるのかについて検討する。従来

は「生成変化」とされたdevenirについて、「能」を介してその演劇的空間と東洋的思想との邂逅を試み、さらに解釈を推し進める。これらの試みを通して、これを「成ること（devenir）」であると示した。

【結 成ること（devenir）の果てに】これら全ての検討を通して、これまで主題化されることのなかった「亀裂」は、ドゥルーズ哲学における重要な「概念」であると呼ぶに相応しいものであり、且つその新たな展望を示す。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (小 谷 弥 生)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	檜垣 立哉
	副 査	教授	村上 靖彦
	副 査	教授	藤川 信夫

論文審査の結果の要旨

本論文は「ジル・ドゥルーズの哲学における「亀裂」の意義について」と題され、三部六章構成と補論が付されている。基本的にはドゥルーズの思想を貫く概念としての「亀裂」の意義について、ドゥルーズ自身の時間論との関連および、ドゥルーズがゾラ、フィッツジェラルド、ラウリーといった作家の文学作品において、どのように展開されてきたかを辿るものである。最後にこうした議論が、能を軸とした日本文化論に接続され、その広がりが見られている。総じていえば文学作品に対するドゥルーズのあつかいを丹念に原点やドゥルーズが読んでであろうフランス語訳にあたりながら、訳語の変遷を念頭におきつつ問題を「亀裂」という主題に照準の併せて描ききったものであり、これまでのさまざまな箇所を発表してきた論考をよくとりまとめた力作になっているといえる。あわせて日本文化論への独自の探究を試みている点も評価できる。

まず第一部では、「亀裂」にかんするドゥルーズの哲学的な議論が展開され、それについての文学的な連関が探られる。ドゥルーズは『差異と反復』などを中心とする前期の哲学的著作において、独自の時間論を展開するが、そこでは第三の時間とされる未来の時間が、ヘルダーリンの言葉を借りた中間休止という「亀裂」として示されることになる。小谷論文でも「亀裂」がこうした中間休止としての未来の時間性を論じるものであることを中心に議論が展開されることになる。さらに小谷自身が修士論文であつかったドゥルーズの『ザッヘル・マゾッホ紹介』のなかでの「死の本能」論に触れられ、こうした第三の時間が、未来という時間的な位相とかわりながら、「死の本能」において説明されていること、そして「亀裂」という主題もそれにかかわることが論じられる。この部分で、ゾラの『獣人』、フィッツジェラルドの『亀裂』、ラウリーの『火山の下』をドゥルーズがとりあげていることが分析される。またブランショの議論との交錯においても、ドゥルーズがavenirとしての未来をfuturとしての未来と区分したことが主題化される。

第二部では文学作品における「亀裂」と「健康」という主題がとりあげられ、再び、ゾラ、フィッツジェラルド、ラウリーの作品があつかわれ、そこにおける「アルコリズム」という症例と未来の時間を示すものとしての亀裂の関係が丹念に探られている。それぞれの文学作品はある種の生の脆さを描きだしながらも、ただたんに死や破滅に行ききるだけではない、生の「健康」という主題がとりあげられ、とくにドゥルーズが文学作品においてこうした主題を展開したことの意味が示されている。それは、亀裂を放置するだけではなく、そこからの回復を目指すということとして、真の狂気としての健康という、ドゥルーズがニーチェから引いてきた主題を一層展開させるものである。

第三部では演劇および能がテーマとしてとりあげられ、そこで「現実化運動」としての芸術の意義と、そのなかで未来の時間として示された「亀裂」がどのように具現化しているかが論じられている。演劇的空間における「仮面」がもつ「空虚」としての役割、能の実践の場面における「離見の見」としての自我の二重性という主題は、ドゥルーズ初期の思考における「影」や「二重性」というテーマを演劇や能という文学とは別の芸術性において提示したものである。ついで付論として能についての議論がさらに展開され、能の実際のあり方とそこでの能面や観客との関係が論じられる。

結論部においては、以上の議論をうけながら、ドゥルーズの議論における「死の本能」と「未来」、そして「健康」という主題がどのように統合されるのかについての小谷の見解が示され、ドゥルーズ後期においてよくとりあげられる「器官なき身体」という主題が、ただたんに有機的なものの無機化を示すだけではなく、そこから器官と

しての生をすくい取るべき方途が、ドゥルーズももちいるルイス・キャロルの言説などをもちいて展開される。ここでは「亀裂」を抱えながらも（死の本能を未来の時間として持ちながらも）それをもちつつなお生きていくこと自身を思想化することが主題となっている。

すでにのべたように、本論考は、文学および芸術という、ドゥルーズにとってもきわめて重要なテーマに焦点を合わせながら、ドゥルーズの哲学概念としての「亀裂」を追求するものであり、質量ともに十分なものに仕上がっていると評価できる。

以上、論文審査の結果、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。